

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので、送付します。



発生予察特殊報第 2 号

病 害 虫 名 キュウリ黄化病
病原ウイルス名 : Beet pseudoyellows virus : BPYV
作 物 名 キュウリ
発 生 地 域 京都府南部

1 発生経過

令和 5 年 7 月、京都府南部の露地キュウリほ場において、退緑黄化症状を示す株が認められた。京都府生物資源研究センターにおいて RT-PCR 法による検定及び RT-PCR の増幅産物の塩基配列解析から、Beet pseudoyellows virus : BPYV の感染を確認した。本病は国内では 1977 年に埼玉県および群馬県で発生が確認され、以後、全国的に発生が確認されている。なお、同試料から Cucurbit aphid-borne yellows virus : CABYV の感染も確認している。

2 病徴

本病の病徴は、キュウリ退緑黄化病(病原ウイルス Cucurbit chlorotic yellows virus : CCYV) に酷似している。発生初期は、葉に薄い緑色の小斑点を生じ、葉脈を残して葉全体が黄化する(写真 1)。症状が進展すると、葉脈に沿った部分を残して退緑して葉全体が黄化し、葉縁部が下側に巻く症状を呈する(写真 2)。さらに症状が進展すると黄化が進み、草勢が低下して減収となる。

3 病原ウイルスの特徴

- (1) 病原は Crinivirus 属のウイルスで、オンシツコナジラミにより媒介される(写真 3)。
- (2) ウイルスに感染した植物を吸汁したオンシツコナジラミは数日間ウイルス媒介能を保持(半永続伝搬)する。経卵、汁液、種子及び土壌伝染はしないとされている。
- (3) 本ウイルスは、キュウリ、メロンおよびスイカ等のウリ科、キク科、アブラナ科植物等、広範な植物に感染することが確認されている。

4 防除対策

- (1) 発病株は直ちに抜き取り、ポリ袋等に密閉してほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (2) 媒介虫であるオンシツコナジラムの防除を徹底する。
 - ① 苗に寄生していない事を確認して、ほ場に定植する。
 - ② 施設の開口部に 0.4mm 目以下の防虫ネットを展張し、侵入を防ぐ。
 - ③ 近紫外線カットフィルムを使用する。
 - ④ 施設では、黄色粘着ロールや粘着板を活用する。
 - ⑤ 施設内及び周辺の雑草は発生源となるので、徹底して除去する。
 - ⑥ 周辺に分散させないため、栽培終了後に全株を地際から切断または抜根し、施設を密閉して死滅させる。
 - ⑦ 薬剤感受性低下を防ぐため、同一グループの薬剤の連用を避ける。

<参考文献>

平成16年度病害虫発生予察特殊報第2号、熊本県病害虫防除所(2005年1月)
防除総覧資料編第2巻野菜(果菜)追録21号キュウリ黄化病、農村漁村文化協会(2015年)



写真1 葉脈間に黄緑色、不整形の小斑点が多数できた葉



写真2 葉脈を残して葉全体が黄化し、葉縁が下方に巻いた葉

* 写真1、2は、熊本県病害虫防除所のウェブサイトから引用



成虫



幼虫

写真3 媒介虫のオンシツコナジラム